将来の地域研究所像について

組原　洋

地域研究所で活動させてもらってきたのは、当然ながら、私のやりたい研究との関連でメリットを感じてきたからである。

研究所では、名前のとうり、地域という場を基本にした研究をおこなってきたので、その場に関わりのある広い範囲の事柄が問題となるわけで、学際的になるのは当然のことである。共同研究をすることでいろいろ知見を広げることができて極めて有益であった。

また、私自身は、専門が法学であることから、具体的な紛争やトラブルを契機としてテーマ設定していくということが従来は多かった。その際に、弁護士的に当事者の代理人として行動するよりは、いい意味で距離を置いて状況把握をするということが必要な場合が、利害関係が入り組んでくると結構多い。その場合、地域研究所での活動とすることで、いいスタンスが取れるということがあった。最終的には、代理人として行動することになる場合でも、その前に、地域研究所としての調査をしておくことで、見通しが非常によくなる。このように、多くの場合、具体的な法的紛争やトラブルを契機とするテーマを選んできたため、解決の必要性とかも他の分野よりは格段にはっきりしていて、実用的、あるいは実践的な性格を深く帯びていた。しかし、こういうテーマだと、あらかじめの予定なんか立たないことの方がむしろ多い。時々刻々の動きに対応していくことが必要になる。

ところで、特に2001年度に学外研究でフィリピン・ミンダナオ島のダバオに住んでからは、NGO、NPO的な活動と関連することが増えた。実際私も、就学前児童のための通所施設や子ども図書館を現に運営している。こういう、教育や文化に関連する活動に関与していると、最低でも１世代以上にわたる、非常に長期の見通しをもって対応をする必要性を感じることが多い。もちろん、こういう分野でも、時代の影響で、動きはとても大きい。特に、開発援助を受けるような地域だと自分たちでは状況を作れず、受け身に対応するしかないので、どんどん流されていく一方で、計画を立ててみたところで現実性を持たないことが多い。だが、そういう状況であればこそ、非常に長い目で見た方向性把握みたいなものが是非とも必要になる。それがないと全然動けなくなってしまう。

このように、私がやってきたこととの関連で具体的に考える限りでは、研究組織のあり方としては、必要以上に大きくなく、自在に変動可能なグループの集まりのような組織の方が、一見バラバラのようでいて、実用に耐えるし、責任ある対応もできる。また、そのような組織であってこそ、個々の研究者の自由な発想を助けてくれるのではないだろうか。

これを今風に考えれば、ネットワーク的な組織ということになろう。実際、何もかも自分で持つ必要はなく、持っているところから借りられればいいのである。そのようなネットワークの起点としての機能を地域研究所が果たしてくれればいいなと個人的には望んでいる。そうすれば、市民一般も含め誰でも利用できる組織になって行くであろう。私は今55歳で、最初は地域研究所の将来像なんて考えても無駄と思っていたのであるが、大学から離れて老後も利用できるような組織になってくれれば、まったく有り難いことである。実際、それぐらい網を広げておくことで、飛躍的な発展も望めるのではないかと、まあ、私としては希望も込めて考えた。